



企画にしても映画にしてもなぜ取り上げなければいけないか、までじっくり考えなければ売れこんじゃいけないんです。



「これは、相手に贈った印象を持たせる、という思ひの言葉あり。」
「いろいろな贈り物をかぶっているから、高野さんで会うたびに顔が通って見てもって貰われるの。」



考えたことを実現する。この仕事が好きで好きでしようがない。新聞社の社員、フリーライターを経て、現在企画会社の代表であり映画配給会社の代表でもある高野さん。
「相手にメリットがあることとなければ売れこんじゃいけないと思うの。私には、いいな」と

誰よりも先に見つけて、売りこむことがすごいヨロコビでもあるのね。今度うちの巴里映画が配給する「フランスの思い出」というのも、派手じゃないけどすごくいい映画ですよ。」
とにかくいいぞっ！と思ったら、何かにとりつかれたように電話をかけまくる、その内必ずいくつかは仕事にむすびつけるという手腕。
「疲れた疲れたと言いつつながら、考えたことは実現しなきゃ気が済まない。この映画の舞台はフランスのルアンスという田舎町。今、旅行会社と、パリの婦人にこの街に寄れるようなツアーを計画中なんです。素敵でしょ。」
取材していると思ったら、いつの間にか売りこまれてしまいました。

高野さんの映画の経歴と、企画した「シャルリン」の出版記念を兼ねたパーティーにて、評論家、出版関係者、芸能界、スポーツ界などから、多勢の人がお祝いに駆けつけた。顔が広いのは仕事上まず重要なことではあるが、「お客さんだけじゃダメだと思ってる。知り合ったら、一定の期間おいてまたフォローしてあげることが大切。」
その言葉を聞いてからすると、広く浅く合った会場の中、誰もが小柄な高野さんを褒め、食いついて話を聞かせるうちに、今こんなことやりたいんだ、何と世おろものなら
「じゃあ、あの人が獲得するもしいわ」と人と人の橋渡し、コーディネート「この本が読者である」

名刺のまん中にたかのてるみと平仮名で大きく名前を入れたフリー時代の名刺。時力タカナのものも使用していた。フリーライターという資格の下に、カッコつけてスーパードライターのつもりで、人々を驚かすに使っていた。

「いつ、どこで誰か私を思い出してくれるかわかりませんがね。」
数多い名刺の中で記憶に残りやすい、生命力のある名刺である。

フリーライター
タカノテルミ

たかのてるみ

TERUMI TAKANO

〒110 0008
Phone 03-3-1

フリーライター
タカノテルミ

タカノテルミ

TERUMI TAKANO

一度見たら忘れられない。これも名刺の立派な役目。

